

『行人』論

— 一郎の救いの問題をめぐって —

横山秀子*

(e-mail : sj0833@daum.net)

目次

1. はじめに
 2. 「腹」が解らず苦悩する女たち
 3. 「腹」を割ることの出来ない夫婦
 4. 娘の存在に託された可能性
 5. おわりに
-

1. はじめに

『行人』（『朝日新聞』1912.12.6.～1913.11.17.）は前作『彼岸過迄』（『朝日新聞』1912.4.1.～1912.4.29.）に続く夏目漱石の後期三部作の二作目として知られている。「修善寺の大患」後、まだ病気がちな中での執筆で、新聞の連載小説という重荷とその人間関係、また弟子との関係等、精神的にも多くのストレスを抱えていた時期だ。このような中で書かれた『行人』の主人公である長野一郎は学者で、凡てのものに対し疑いをかけ、自分の周りの人々が信じられず、ついには自己不信にまで陥り孤立していくという人物だ。『行人』研究はこのような一郎の苦悩の中に見られる近代知識人のエゴイズムを中心に研究されてきた。その土台の上に弟の二郎と一郎の妻である直との関係を「二郎のお直に対する秘められた心」¹⁾として解釈したものや、一郎の友人であるHや二郎の立場から「使者、報告者の意味として登場人物たちの位置と役割や関係性」²⁾を論じたもの等、

* 忠南大学校 日語日文学科 博士修了, 近現代日本文学

1) 伊豆利彦 (1969) 「『行人』論の前提」『日本文学』, 日本文学協会, pp.1-17

一郎の関係性に焦点を置いた研究も多い。最近の『行人』論の動向としては1980年代から90年代にかけて柄谷行人³⁾や小森陽一⁴⁾等を中心に幅広い知識と多角的な読み方を試みた研究が行われ、1990年代から2000年代にかけては野網摩利子⁵⁾等女性の目から見た研究に目を引くものがある。また韓国においても「一郎と二郎を中心に」⁶⁾解釈した研究の他に「女性像を手がかり」⁷⁾としたものや「家族関係から読み取る」⁸⁾ことを試みたものなど一郎の家族関係からの作品研究も盛んに行われている。

これらの研究をみていくとそろって一郎の未来を「恐ろしいX」として自殺や狂気として捉えているものがほとんどだ。その理由として一郎は神を否定し宗教に頼ることが出来ないにもかかわらず「絶対という名の狂気」⁹⁾を追い求めてもがき苦しんでいることがまずあげられる。次に二郎が過去の兄との関係を後悔し、今ではもう取り返すことも償うことも出来ないことを深く懺悔したいという告白が記されていることによる。またHの手紙は「この眠りから一郎が永久覚めなかつたらさぞ幸せだろう、しかし同時にさぞ悲しいだろう」として筆がおかれてはいるが、この「眠りから覚めない」という句が死を連想させるものであり、一郎にとっての死は苦しみからの解放であるかもしれないが、それを見守る我々にとってはさぞ悲しい出来事になるだろうと書かれていることがその根拠となっているのである。さらに「死ぬか、気が違うか、そうでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つしかない」という一郎の心を最も端的に表現したこの言葉は、宗教を否定する彼にとって残されたものは狂気か死しかないことを意味している。このように見ていくと一郎の未来は救いどころかただ絶望の谷に赴く人の姿であり『行人』という作品に救いや希望の光をみつけることは難しい。

しかしながら漱石の作品の中でこのように救いが見えないのは『行人』だけに限られたことではない。『行人』以前の中期三部作である『それから』（『朝日新聞』1909.6.27~10.14）や『門』（『朝日新聞』1910.3.1~6.12）においても同様な傾向を見ることが出来る。これらの作品の主人公達は皆、心に平安を求めることができないまま物語の幕が閉じられている。彼のどこまでも神や宗教から救いを受け入れようとしない頑なな姿は「安易な救済を描かなかつた漱石の病の深刻さと絶望の深さ」¹⁰⁾と解釈することができるのである。

2) 曾我理絵 (1998) 「『行人』考察—二郎の〈いま〉」 『日本文学研究』 33号,梅光女学院大学日本文学会,pp.85-96

3) 柄谷行人 (1992) 『漱石論集成』 第三文明社

4) 小森陽一 (1995) 『漱石を読みなおす』 ちくま新書

5) 野網摩利子 (2012) 『夏目漱石の時間の創出』 東京大学出版会

6) 송현순 (1995) 『一郎와二郎를 중심으로』 일본어문학 제1집, pp.265-295

7) 최명희 (2001) 「『고진』론—여성상을 실마리로 하여」, 『나쓰메소세키文学研究』 <創刊号> 제이앤씨P.524-554

8) 吳敬 (2003) 『가족관계로 읽은 소세키 문학』, 보고사, P.145-178

9) 萩原桂子 (2004) 「絶対という狂気—漱石『行人』」 『九州女子大学紀要』 第41巻1号,九州女子大学, pp.91-104

10) 高橋正雄 (1996) 「漱石文学における癒し—「神経衰弱」者の理解と救済—」 『日本病跡学雑誌』 第52

それにもかかわらず漱石が作品の中で救われそうもない主人公を描き、救いのない結末を執拗に書き続けたのはいったいなぜなのだろうか。それは決して絶望が結論なのではなく、そのような苦悩の中から心の平安を得るにはどうしたらいいかという漱石にとっての救いを求めて、その筆を止めることが出来なかったという解釈も可能なのではないか。なぜなら一郎は二郎に対して「信じられないこの自分をどうか信じられるようにして呉れ」と懇願し、Hに対しては「どうしたらこの研究的な僕が実行的な僕に変化することが出来るだろう。どうぞ教えて呉れ」と自分を変える方法を教えて欲しいと切実に訴えているのだ。このような言葉からは一郎が絶望のなかにも一筋の光を求めていることが理解できるのである。

一郎にとって一番の苦悩は人間の「腹」が見えないことであり、それ故に人間を信じることができず、円満な人間同士の関係を結べないことだった。『行人』ではこの「腹」という言葉が多く使われている。「腹」とは胃や腸など食べ物を消化する臓器を示すと同時に、子の宿る母の胎内を示し、子供の生命を育む器官でもあるが、比喩としては感情や心の底の本心を表したり度胸、精神を示す。一郎はこの「腹」を是が非でも攫もうとするが、求めれば求めるほど彼の人間不信はますます深まり、孤独に陥っていく。人間の「腹」すなわち本心を攫もうとすることはそれ自体が無謀なこととも言える。しかしそれを求めようと苦悩しているのは一郎だけではないことが『行人』の背景として登場する女たちを通して表現されているのであり「腹」という表現を使いながら人間の正体を明らかにしようとする試みがなされているのである。本稿ではこの「腹」というキーワードを中心に宗教に救いを求めることが出来ない知識人の代表である一郎の苦悩からの解放を探求していこうと思う。

2. 「腹」が解らず苦悩する女たち

『行人』の第一章の「友人」では一郎の苦悩を語る前の前奏として「腹」がわからずに苦悩する女たちが描かれている。二郎の友達である三沢が偶然、大阪で胃の悪い芸者に出会う。三沢は酔った揚句、彼自身の腹の中も食べ物と胃液が怒涛を打つくらい胃がよくないにもかかわらず、その女に「酒を呑んで胃病の虫を殺せば、飯なんかすぐ喰える。呑まなくっちゃ駄目だ」と強制的に酒を勧める。そのために女は病院に入院することになるが食べ物を一切受け付けず、病状は悪化するばかりだ。二郎は病院で胸が腹につく程背中を重なり合わせている憐れなこの女の姿を見て、女の忍耐と美しい容貌の陰に潜んでいる恐ろしい病苦の正体を想像した。そして自分の器量と芸を売りものとして生きている流行の芸者が病気に蝕まれていくのはどれ程心細いものだろうと考えた。

三沢がこの芸者に執拗に酒を勧めたのは実は彼の記憶に残るある精神病の娘によく似て

いたからだった。この娘は新婚早々、夫が家を空けたり遅く帰ったりすることで心を痛めたあげく精神病に罹ってしまった。三沢の父がその娘の仲人をした関係から娘と三沢が一つの家に共に暮した時期があったが、その時娘は三沢が家を出ようとする度に「早く帰ってきて頂戴ね」と言うのだった。それが果たして三沢に対する好意からくるものなのか、あるいは精神病のため過去の夫に言えなかった言葉を言っているだけなのかその「腹」の中の真実は娘が今は亡き人となり誰にもわからない。しかし三沢は今でもこの娘の潤んだ黒い瞳を忘れることが出来ないでいるのだった。この娘も胃の悪い芸者も「腹」の正体がわからず苦悩した女たちなのである。

また盲目の女の話を書いた場面がある。この女は二十年前、父の友人だったある男が自分を捨てたその理由がわからず苦悩した女だった。

この眼は潰れても左程苦しいとは存じません。ただ両方の眼が満足に開いて居る癖に、彼の料簡方が解らないのが一番苦しい御座います。11)

女は男の心が解からずに二十年という歳月を苦悩の内に生きてきた。そして「天下の人が悉く持つてある二つの眼を失つて、殆んど他から片輪扱ひにされるよりも、一旦契つた人の心を確実に手に握れない方が遥かに苦痛なのであつた」という自分の苦悩を父に打ち明けた。この女もやはり昔の男の「腹」の内が解らないことを失明すること以上の苦悩として生きてきたのだった。このように『行人』ではこれから始まる物語のプロローグとして「腹」の内がわからず苦悩して生きてきた女たちにスポットを当てているのである。

次に『行人』では人間の生涯の中で一大行事とも言える結婚に光を当てて、結婚における不透明な部分を浮彫りにしているが、ここでも「腹」という表現が多く使われている。

長野家の下女である貞は器量から言っても教育から言ってもこれという特色のない女だ。それにもかかわらず会ったこともない佐野という男から気に入ったと言われて結婚の話が進んでいく。二郎は母からの頼みで結婚相手の佐野という人物を知る為に大阪まで趣き、一緒に食事をし、言葉を交すが二郎はこの佐野という人物が唯、世間並ということしかわからない。ましてやまだ会ったこともない貞という女をどうしてそんなに気に入るのかという彼の「腹」の中は到底知り得ぬことであつた。当時、新女性を唱える時代ではあつても庶民の結婚はいまだに家長の考えに従って男女が結ばれていくのが当たり前な時代であつた。しかし二郎は個人の愛が排斥された貞の縁談が手早く進んでいくのを目にしなが、結婚という人生の一大事がこんなにも簡単に決められていくことに心許無きを受ける。そして自分にも当然番の廻ってくるべき結婚問題を人生における不幸の謎の如く感じるのだった。

貞の結婚式は朝から雨がしょぼしょぼと降る、婚礼には似合わない佻しい天気の中

11) 夏目漱石 (1975) 『漱石全集』第 5 巻, 岩波書店, p.575

行われた。一郎は結婚の当日に突然、仲人を頼まれて躊躇するが「お前たちは何もしないで済むようにちゃんと拵えてあるんだ」と父が説明する。

式が始まると式壇の左右にある別室の右側からは兄が新郎の佐野を連れて入り、左側からは直が新婦のお貞を連れて入ってそれぞれ着座した。一郎夫婦は真面目な顔をして向かい合わせに座り、花嫁と花婿も慎んだ姿で対座して式が始まった。

式壇を正面に、後ろの方にずらりと並んだ父だの母だの自分達は、此二様の意味を有つた夫婦と、絵の具で塗り潰した綺麗な太鼓と、何物を中に蔵してゐるか分らない、御簾を静粛に眺めた。

兄は腹のなかで何を考へてゐるか、余所目から見ると、尋常と変る所は少しもなかつた。嫂は元より取り繕つた様子もなく、自然其儘に取り済ましてゐた。¹²⁾

この結婚式場の式壇に飾られている「綺麗な太鼓」は赤黒い手が新郎に見えないように綺麗に化粧で塗り潰した新婦お貞の手の手ようであり「中身の分からない御簾」は、結婚という未知なるものを隠しているかのようなようだった。そして尋常と少しも変わらない姿で、仲人の代理をつとめる兄と嫂のその「腹」の中は「あまり幸福ではなかった運命の割前を、若い男と若い女の頭の上に割り付けて、又新しい不仕合わせな夫婦を作る積もり」のようであり、その様子は「凡ての結婚なるものを自ら呪詛しながら、新郎と新婦の手をにぎらせなければならぬ仲人の喜劇と悲劇を演じている」ようでもあった。

結婚式の途中で巫女が腹痛で引き返す場面がある。するとすぐにお貞の介添が来てその代わりに勤めている。結婚の式事は仲人が誰であれ、巫女が誰であれ、新郎新婦が誰であろうと人間の中身は関係なく、ただ昔からの慣習とときたり通りに行われていくのである。無事に式を終えた二人は雨がまだ降りやまないプラットホームから淋しく大阪へ出発していくが、この雨の様子は漱石の「暗い結婚観」¹³⁾が貞の結婚式の間中、降りしきる雨によって表現されていることが指摘されている。

貞の結婚は結婚する本人の意志や思いが完全に無視された昔からの古い慣習とときたりによるものだ。慣習とは社会の内部で歴史的に発達し、その社会の人々に広く承認されている伝統的な慣習をいう。その慣習の中でも結婚は一对の男女が結合され、夫婦となることにより社会から「一人前」として認められる人生最大の儀式である。当時、文明開化により近代化された社会の中であっても、昔ながらの慣習に何の疑問を持つことなくそのまま行われていることが貞の結婚に表れているのである。

『行人』ではこのように一郎の苦悩を描く前に、腹の具合の悪い芸者や精神病の娘、そして盲目の女たちによる人間の「腹」を攫むことのできない苦しみを背負って生きた女

12) 夏目漱石 (1975) 『漱石全集』第5巻,岩波書店, p.624

13) 閔英映 (2007) 「『行人』에 있어서의 「비」」 『일본문화학보』 제36집, 한국일본문화학회, p.284

たちが描かれ、さらに個人の愛や夫婦の愛を黙視した貞の中身の見えない結婚を描いている。それは人間同士の関係の中で「腹」が見えないことから生じる一郎の苦悩、それ故人を信じるができないという苦悩は実は誰もが陥る苦悩であることを証明しているのである。また貞の結婚を通して肝心の夫婦となる男女の愛よりも結婚という慣習だけが先走りした昔のままの制度に甘んじて生きる女の姿を描きながら一郎と直の夫婦の問題と根本は同様であることが示されているのである。

3. 「腹」を割ることのできない夫婦

『行人』ではこのように「腹」の見えないことから生じる苦悩を描くと同時に「腹」が見えないからこそ「愛嬌」や「愛想」を使って生きる人々を描いている。「愛嬌」「愛想」とは人に接する時に示す好意や愛らしさを表したもので、人間関係を円滑に進めていくために、相手に対するさなぎまな想いをいったんこのような形で表現しているのである。物語の冒頭では一郎夫婦とは対照的な愛想のいい岡田夫婦の姿が描かれている。

岡田はかつて長野家の書生であり、長野の両親の世話によりお兼と結ばれた。長野家をよく出入りしていたお兼は五年という歳月の間に持ち前の愛嬌にどことなく女人らしき媚びを見せて、すっかり妻らしくなっていた。彼女はいつも目の縁に愛嬌を漂わせ、二郎が岡田の家に居候をしているときも、いやな顔を見せずに「まあもう一日二日は宜しいじゃございませんか」と愛想が言える女だった。また岡田も自分が結婚して今このように生活できるのはすべて長野家の両親のおかげであることを何回も言っただけで年寄りの気をよくさせる愛想があった。

大阪の旅行で久しぶりに岡田夫婦に出会った一郎の家族達は口をそろえてお兼が「いい奥さんになった」と誉め立てた。彼らは誰が見ても仲睦まじい夫婦だったのだ。しかし二人の間に何のわだかまりがない訳ではなく、岡田はお兼に子供が出来ないことを気にかけていたし、お兼は岡田の顔がいつも強く酒精に染められ、酒代に費用が掛かることを気にかけていたのだ。それでも二郎が「結婚してからあゝ親しく出来たら嘸幸福だろう」と思うくらい仲が好く見えるのはひとえに岡田とお兼の二人が共通に持ち合わせている愛嬌からだ。

愛嬌は複雑な人間関係の中で生きていく上で潤滑油の役割をする有益な技巧となる。したがって長野家でも大阪に旅行中、母は湯から上がった兄に対して「大変好い血色におなりだね。それに少し肉が付いた様じゃないか」と愛嬌を言う場面がある。実は長野家の家族たちは皆、一郎が痩せているのは神経のせいであると気を揉んでいたし、当人も何かの刑罰のように忌み恐れていたのである。兄の心をよく知っている母は常に兄の精神状態を気をかけていてこのような愛想を言うのだった。また父も新しく家を構えた二郎の部屋を見回しては、大したことのない部屋であっても「好い部屋だね」と愛嬌を言っている。このようにたとえ

親であっても子供に対して愛嬌を使ってその機嫌をよくしようとしている姿を見ることができるのである。

しかし一郎夫婦と言えば、一郎は無愛想で直は無口というように二人とも愛嬌のない似た者同士の夫婦だった。大阪旅行の最中に兄と直が二人で並んで歩く姿を母が見て眉をひそめる場面がある。なぜなら一郎と直の間が一問も開いていたからだ。一問とは今の単位で言えば百八十センチメートルにもなる。母はその後ろ姿を見ながら「あれじゃまるであかの他人が同なじ方向へ歩いていくのと違やしないやね」と言いながら女の直がなぜ夫の機嫌をとることを考えないのかと非難しながらも、直がなぜ一郎に対してだけわざわざつらあてがましい態度をとるのか理解ができなかった。

直は恥ずかしがり屋ですぐ顔を赤くさせる直とは正反対に冷たいと思われるほど冷静で表情を変えない女だ。しかし二郎は以前から彼女が「持って生まれた天然の愛嬌のない代りには此方の手加減で随分愛嬌を絞り出す事の出来る女」と見えていた。二郎がこのように直を見る反面、一郎は「その人の心を研究しなければ、居ても立ってもいられない存在」であるにもかかわらず、直の精神、あるいはそのスピリットがどうにもつかむことができないことに我慢ができなかったのだ。一郎は二郎に直の「もっと奥の奥底にある御前の感じ」を聞き出そうと「直の貞操を試してほしい」という驚くべき依頼をする。二郎はこのような兄の姿がまるで「砂の中で狂う泥鰌」のように見えた。一郎は長野家の長男として我儘に育った上、自尊心が強く、自分中心に物事を考える自我の塊のような人物だ。そのため二郎は兄の頼みを断りきれず直と二人で和歌山に出掛けることになる。二郎は兄の願い通りにこの旅行で何とか直の正体を見極めようとした。しかし彼女は到底正体の知れないものだった。この正体の知れないところが嫂だけの特色であるにもかかわらず、兄はこの正体を是が非でも見届けようとした結果、苦悩の淵に陥ったのであろうと今さらながら兄の苦悩の原因について考え始めるのだった。

直は和歌山で嵐に出会い、足止めされて泊まることになった夜、自分の腹の中を二郎にこのように告白している。

妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌よ。
大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの。¹⁴⁾

驚く二郎に対して直はさらに「死ぬ事だけはどうしたって心の中で忘れた日はありやしないわ」と腹の内を吐露する。直にとって一郎の妻であり長野家の長男の嫁であるというのは形式だけのことだった。直の精神は「本当に腑抜なのよ。ことに近頃は魂の抜殻になっちまっ

14) 夏目漱石 (1975) 『漱石全集』第5巻,岩波書店. p.512

たんだから」と言うように夫から手をあげられても逆らうこともしなければ抵抗もせず、何の反応も起こさない忍耐の権化とも言うべき覚悟で不気味に静まり返っているのだ。それは一郎が「おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐる事丈は慥だ」と言うことを裏付けるように喜びや悲しみといった感動のない魂の抜殻を証明しているのである。

妾なんか丁度親の手で植付けられた鉢植えのやうなもので一遍植えられたが最後、誰か来て動かして呉れない以上、とても動けやしません。凝としてゐる丈です。立枯になる迄凝としてゐるより外に仕方がないんですもの。15)

この告白からは直が結婚生活に何の希望や喜びを見いだせていないことがわかる。一郎がHと旅をする時も、直は「妾に愛想を尽かしてしまったからそれで旅行に出掛けたというのよ。つまり妾を妻と思っていらっやらないのよ」と言っている。一郎が旅に出たのはHに勧められてやむなく重い腰を動かしたのであるが、直は自分の事なんかどうでも構わないから旅に出掛けたと考えているのである。

「愛想を尽かす」とは愛情が冷めて嫌われたということを意味する。『道草』（『朝日新聞1916.5.26.～12.14』）では「愛想を尽かす事が一番非道い刑罰であると思っている」と健三が言っているが、直も一郎から最も酷い仕打をされていると思っていたのかも知れない。しかし直は一郎に対して何の感情もないわけではない。貞の結婚式を目前に控えて一郎が「一寸貞さんに話があるんだ」といって貞と二人で二階で三十分程何か話していた。二郎はその時、嫂の唇に著しい冷笑の影が閃き、二人が二階に上がっているその間、嫂が平生の冷淡さに引き換て、尋常より機嫌よく話したり笑ったりする裏に不機嫌を隠そうとする不自然の努力が強く潜在していることを読み取っている。

直は愛嬌こそないが、針鼠の様に尖っている兄のその神経を寸時に機嫌よくさせる巧妙な手口を持っていた。それがどのようなものであるのかは記されていないが、直と二郎が嵐のために一晩泊って帰ってきた時も直によって一郎の神経が和らぎ、冗談まで言うくらい心がほぐれる様子を二郎は直接見ているのだ。一郎の精神の安定はまさに直にかかっていると言ってもいいほどなのである。しかし彼女は気まぐれとも取れるような態度で一郎に暖かに接したかと思うと、ある時は面当てがましく氷のように冷たい態度を一郎に浴びせかけている。一郎が「女の正体が不可解であり、お直の性質が不条理であり、これが男にとって、堪えがたい欺瞞となって、これを大様に信じることができない」16)と言うのはこのような直の態度が要因の一つとなっているのだ。しかしそれにもかかわらず一郎が妻のスピリットを求めずにはいられないのは直の態度に翻弄されながらも彼女の自分に対する愛情、あるいは親切を見るたびにそこにはかり知れない心の潤いと平安を感じるからなのである。

15) 夏目漱石 (1975) 『漱石全集』第5巻,岩波書店, p.640

16) 瀬沼茂樹 (1970) 『夏目漱石』東京大学出版会, p.235

漱石は技巧は道具に過ぎないがその本体を表すためには必要不可欠なものであることを『文芸の哲学的基礎』17)において語っている。愛嬌や愛想も技巧の一つであり、本体である愛を引き出すために、あるいは「腹」をわって分かり合うためには必要不可欠なものなのである。

一郎は直の愛を引き出すためには技巧が必要であることを十分に気づいていた。しかし彼は父にも母にも子供にさえも綾成すことを知らない自分であることを自覚していた。一郎はそんな自分をどうすることもできず、ただ孤独の淋しさを瘠けた頬に漲るしかなかったのだ。一方、直も「此方の手加減で随分愛嬌を絞り出す事の出来る女」であるにもかかわらず心が枯渇した状態なのであった。

人間はたとえ親子、兄弟、夫婦の仲であっても「腹」を割って話さない限りその「腹」の中を理解することは難しい。その中であって「愛嬌」は緊張した人間関係を解きほぐし、お互いが相手を思いやることのできる情の接点を結ぶことによって腹を分かち合うことができる手段であり方法としての役割を果たすものなのである。一郎夫婦がこの「愛嬌」をお互いのために十分に使えないことが一番の不幸であるといえる。

『行人』の次作の『ころ』(『朝日新聞』1914.4.20.~8.11)では先生が「私」に自分の過去の凡てを告白することを約束し「あなた限りに打ち明けられた私の秘密としてすべてを腹の中にしまっておいて下さい」と手紙の最後を結んでいる。先生が「私」に凡てを打ち明けようとしたその理由は「あなたが無遠慮に私の腹の中から或る生きたものを捕まえようという決心を見せたからです」と言っている。先生は自分の「腹」を分かち合うことのできる相手をやっと見つけて死に至ることができたのである。

先生が過去に「腹」の中を打ち明けることができずに苦悩したように一郎もこの「腹」という不可思議な世界を内面に抱え苦悩している人間の代表として描かれているのである。また先生の「腹」の内を最後まで知らなかった妻、静の苦悩は並大抵のものではなかったことは想像に難くない。同様に一郎と「腹」を分かち合うことができない直もいつでも死ぬ覚悟をするほどに苦悩の絶頂を通り越して立ち枯れている程なのである。このように一郎と直は互いに夫婦の愛を求めながらその内面にある愛情を引き出すことができずに二人の愛の関係を築くことに苦難し続けているのである。

4. 娘の存在に託された可能性

一郎は書物を読んでも、飯を食っても、散歩をしても、二六時中何をして、其処に安住することが出来ず、こんな事をしてはられないという思いに駆られた。不安で癡としていられないばかりか、進んで止まることを知らない科学の発展は瞬時も止まる事を許してくれず、

17) 1907.4.20.東京美術学校で行われた講演に加筆し、同年5.4~6.4『東京朝日新聞』に連載したもの。

何処まで行っても止まれず、止まれないばかりか刻一刻と速度を増していかなければならないのだった。一郎は科学の発展による人間全体の運命に対する不安を自分一人に集めてその恐ろしさを経験していたのである。Hはこのような一郎をどうかして救い出したいと考えたが、頭に浮かぶのはやはり宗教という文字しかなかった。一郎は「宗教家になるためにこの苦しみに耐えているのかも知れない」と思うくらい宗教的だった。しかし彼は宗教的であるにも関わらず凡てのことに對して信じることができないでいるのだ。それが一郎の矛盾であり苦しみであった。

一郎は学者として学校に勤務しながら両親と妻と一人娘、そして妹のお重と後に家を出ることになる弟の二郎、さらに奉公人と下女まであわせた大家族で暮している。漱石の作品のほとんどは自伝的小説である『道草』を除けば、親や親族から孤立し子供にも恵まれない夫婦二人だけの生活が描かれているのを考えると『行人』は家族、全てがそろって一つの家で暮し、中でも芳江という娘を描いてとても稀な設定がされていることになる。なぜ『行人』だけこのような設定をしたのであろうか。

一郎と直の一人娘である芳江は母の血を受けついだ黒い瞳と蒼白い頬という容貌に、世話の掛からない、これもまた母似と言うべき直の稟性をそのまま受け継いだ娘だった。そして「よくあれ程馴付得たものだ」と誰もが思う様に母の後を「奇跡の如く」追って歩いた。直はそれを日本一の誇りとして家族に見せ、特に一郎に対しては残酷な敵討ちでもするように見せびらかしていた。直にとって芳江の存在こそが自分が生きている意味を見出せる唯一の存在だったのだ。

一郎は「芳江は下にいるかい」と芳江の在処をいつも注意して二郎に尋ねたり、下の階にいる芳江の楽しそうな笑い声に耳を傾けたりしている。また時々裏へ出て芳江をブランコに載せて、背中を押して遣ったりしている。一郎の視線は実は絶えず芳江に向いており、言葉にはしないが、彼の視線や行動には娘を思う気持が十分に表現されているのである。しかし一郎は子供をあやす方法を知らなかった。また常に書齋裡の人であったため、いくら腹のうちでこの少女を寵愛しても外に現れる親しみの程度は甚だ希薄だ。したがって芳江にとって父という存在は怖くて近寄りがたく、母にだけなついている状態なのだ。

一郎の精神状態がますます悪くなって家族が集まる食事や団欒も寂寞たるものになっていた時、席に列ったものが一度に声を出して笑う種になるのはいつも唯、芳江ばかりだった。子供はその存在自体が愛らしくていつの時代にも人々に笑顔を与える存在であるが、芳江もまた長野家にとって唯一、心を和ませる存在だったのである。

日増しに孤立してただ黙って独り書齋へ退く一郎を心配する家族は、芳江に父から果物を貰わしたり菓子を受け取らしたりした。また母は一郎が帰ってきたら着替えを持って娘と共に部屋に行くように直にさせた。二郎が家を出て独立することを報告するために兄の部屋に赴いた時、直と芳江が兄を出迎えるところをちょうど目にしている。

「大変遅くなりました。嗚御窮屈でしたらう。生憎御湯へ這入つてゐたものだから、すぐ御召を持つて来る事が出来なくつて」嫂は斯う云ひながら兄に挨拶した。さうして傍に立つてゐた芳江に、「さあ御父さんに御帰り遊ばせと仰やい」と注意した。芳江は母の命令通り「御帰り」と頭を下げた。18)

二郎は永らくの間、嫂が兄に対してこれ程家庭の夫人らしい愛嬌を見せた例を知らず、又この愛嬌に対して柔らげられた兄の気分がこんなにも彼の眼に強く集まった例も知らなかった。一郎はその僅かな妻と娘との対面の時間を心待ちにしており、このわずかな時間こそ最も至福に包まれる時間だったのである。一郎は誰も信じられず、信じられるものが何もない世の中でたった一人であるという孤独感を抱えて生きている人間だ。この孤独感の中やっとの思いで家に帰ってきた時、彼を迎えてくれる妻と娘の存在に一郎の心はどれほど潤わされただろうか。またそのような様子を見守っている直もまるで芳江が自分にとっての唯一の母であることを天下に自慢するごとく、夫の孤独な心を潤すことの出来る唯一の存在である自分としての幸福感に満たされた一時なのではないか。

漱石の作品にあって三角関係は不安と葛藤を呼ぶ関係だ。しかし夫と妻と子という血縁で結ばれた最小単位の家族の関係にあっては誰とも取り替えることができない幸福の原点となる関係なのである。特に一郎夫婦のように夫と妻という相対が緊張する関係のなかで子供の存在はその緩和材としての役割を果たしていると言える。

実際に漱石の子供との関係はどうであったのだろうか。漱石には全部で七人の子供がいたが、最後に生まれた子はすぐに亡くなってしまったので、成長したのは六人であることが知られている。『彼岸過迄』（『朝日新聞』1912.1.1.~4.29）では漱石の五女、ひな子の鎮魂ともいえる宵子の死が克明に描かれている。「ひな子抄」19)によると漱石が『門』の連載を始めたその翌日にひな子が生まれた。『門』から『彼岸過迄』の間のこの時期はひな子の誕生、漱石が心に秘めていたと言われる大塚楠緒子20)の死、生死をさまよった修善寺の大患、ひな子の急死というように生死の不思議を重ねて味わった時期でもある。その期間に子供の死を中心とした死に関するそれぞれの出来事は人間の命がその何物にも取り替えることの出来ない「パーソナル」なものであることを自覚させられた期間だったのである。

漱石の子供に対する視線はあまり幸福なものとは言えないことが『漱石の思い出』21)の中で語られている。それは自分の幼少時代を思い出させるものであり、子供に対する思い

18) 夏目漱石 (1975) 『漱石全集』第5巻, 岩波書店, p.603

19) 和田謹吾 (1974) 「ひな子抄—「有る程の菊」をめぐって—」『国文学』第19巻13号, 学灯社, pp.82-87

20) 大塚楠緒子 (1875.8.9 - 1910.11.9) 明治末に活躍した歌人、作家。夫を通じて交流のあった夏目漱石は「あほどの菊投げ入れよ棺の中」という句を詠んだ。

21) 夏目鏡子 / 松岡譲筆録 (1966) 『漱石の思い出』角川書店

にも温かいものと冷たいものが時々気分や健康状態のなかで交錯していたことは確かだ。子供と共に過ごした生活の中で漱石自身、自分が幼い時にされた仕打をそのまま自分の子にもする事があったのかもしれない。そのような自分に気づいた時に自分の中にまさしく受け継がれた罪が根付いていることを自覚していったとも考えられるのである。

それは漱石の作品の中の子供が出てくる作品をいくつか見ていくと理解できる。例えば『夢十夜』の「第三夜」を見てみると、自分は六つになる子供を背中に背負っている。その子は慥かに自分の子であるが、眼が潰れて青坊主になっている。その小僧の「もう少し行くと解る。一度度こんな晩だったな」と言う言葉にぎょっとして「何が」と問うと「何がって知ってるじゃないか」と嘲り声で答えるのだった。自分は自分の子であるはずなのにこんな気味の悪い子を早く森に捨ててしまおうと足を早めるが、その小僧が「自分の過去、現在、未来を悉照して、寸分の事実も洩らさない鏡の様に光っている」のだ。そして自分が百年前に「一人の盲目を殺したという自覚」を覚える。今まで苦勞して背負って歩いてきた子によって自分の罪を自覚させられるのである。

また『門』の主人公の妻である御米は子供を授かるが、授かるたびに次々と亡くす。そんな自分が「生を与えたものの生を奪うために、暗闇と明海の途中に待ち受けて、これを絞殺したと同じ事」をしていると考え、恐ろしい罪を犯した悪人と己を見做さない訳にはいかなない心情を味わう。自分が子供を殺したという「時ならぬ呪詛の声」を聞いていた御米はとうとう易者の門を潜った。そこで言われたのが「貴方は人に対して済まない事をした覚えがある。その罪が祟っているから、子供は決して育たない」という恐ろしい言葉だったのだ。御米はこの時、自分の罪をはっきりと見せられたのである。

さらに『こころ』では「子供は何時まで経ったって出来っこないよ」と言う先生に「私」が「何故です」と聞くと「天罰だからさ」と答えている。次作の『道草』では細君の出産で産婆から手を貸してくれと云われた時、骨に應えるような恐ろしい力で健三の腕にしがみついた細君の身体に受ける苦痛を精神的に感じ「自分が罪人ではないかという気さえた」とある。このように漱石の作品の中で子供の存在はそのほとんどが罪と連結されているのである。

また『彼岸過迄』では宵子の葬式が終わって火葬場で待っている間の人々の往来の中で盲人がまだ幼い女の子に手を引かれて行く。ここでは子供は導き人として描かれているが、『夢十夜』の「第三夜」でも同様に罪の自覚をすると同時に子供が自分の行く道を示している。人間は罪の自覚が行われた時、初めて自分の救いを正面から取り込むことができる。救いは罪の自覚から始まるからだ。その罪の自覚を促すものが子供であり、その子供が導き人の役割を果たしているのである。

子供はその命がこの世に誕生するまでの間、母の胎内すなわち腹のなかで育つ。その命の誕生は今日の科学でも解明できない神秘的なものだ。しかし子供が誕生を果たした後は、子供の成長は自然な人間の生を直接見せてくれる存在でもある。一郎の苦悩が文

明の進化による科学の発展という外的な要因だけではなく、自分という存在の根源に眼を向け、自分の内部にある引き継がれた罪や悪を気づかせてくれる存在として娘の芳江を見た時に、ここから救いの糸口をつかむ可能性があると考えられるのである。また何よりも夫と妻と子という関係が孤独に陥っている一郎を救うことのできる唯一な関係であるといえるのである。

5. おわりに

『行人』は人間不信から自己不信にまで陥っている一郎の苦悩が彼だけの特別なものではないことが胃の悪い女、精神病の娘、そして盲目の女によって描かれている。これらの女達は「腹」が分からず、その愛を得ることができずに苦悩した女達だ。「腹」は人間が肉体を維持していくために食べ物を消化する重要な器官であると同時に子を宿す場所であり、人間の本心が潜んでいる場所でもある。女たちの「腹」が分からない苦悩はまさに一郎の「妻の心を攫みたい」という苦悩に等しく、同時に女達はその苦しみに耐え忍びながら生きる姿は、愛を得ることができなくても自分の位置を動かずに忍耐している直の姿でもあった。さらに実際に胃潰瘍に苦しみ、精神衰弱に悩んだ漱石自身の苦しみであったといえる。そして貞の結婚を通し、形式だけを重要視した中味の解らない結婚、先の見えない結婚を描きながら人間の中味という人格を無視した行いが何の疑問もなく行われていることを描いているのである。

一郎が直のスピリットをつかみたいというのは直と「腹」を割って分かり合いたいということだ。彼の求めるスピリットとは心であり、一郎は直と心から一つになりたかったのである。直のスピリットを執拗に求める一郎の精神状態はせっぱ詰まった状態だった。彼は科学にも宗教にも自分の背負った重荷をまかすものを見つけられず、今の社会や人類の未来にも失望し、自分自身の身体や心さえも自分を裏切っていくように自己の存在にさえ矛盾を抱えている状態だったのである。このような一郎を「鬱病というよりは精神分裂病」²²⁾に近い症状であると研究されている。周囲から見れば突然怒ったり、あるいは涙をぼたぼた流したりと感情の起伏の激しい様子はまさに狂気と見てとれるのである。

一郎は現実の生活にあっては彼を心配し、愛する人々に囲まれている。父も母も長男として可愛がってきたし、弟の二郎も妹のお重も兄の精神状態を心配している。妻もいて娘もいて一郎とともに旅に出るような友人もいるのだ。しかしそれでも一郎は幸せではない。彼にとって親子、夫婦、兄弟、友人というものがただ形式だけにとどまるものであるならそのような関

22)土居健郎 (1982)『漱石の心的世界』角川書店.p.146

係は何の意味もないからである。したがって一郎は「腹」を割った関係を見いだせない限りどこまでも孤独と不信感を抱いて生きていくしかないのである。自由の許された時代の背後にある孤独と淋しさに耐えてたとえ親子、夫婦、兄弟であっても「腹」を分かち合うことが難しい個人の時代が到来していることを漱石は一郎に託していると言える。

一郎がHとの旅を終えて帰って来る場所はやはり父母と妻のいる家しかない。そこは父と母と子というつながりが連続された場所でもある。その基本となる夫と妻を結ぶ結婚はもともと神前に誓うように聖なるものであり、結婚して幸せな家庭を築き、子孫を繁栄させるのが天から与えられた最大の祝福であった。自分がこの世界に生まれた意義と価値を見いだそうとした時、子供は自分と未来を結ぶ存在であり、肉体的にも精神的にも繋がれた夫と妻と子という家族関係は人間が幸福を得るための最小単位の有機体として存在するのである。そのような観点から夫と妻という一對一の直線的な関係から夫と妻と子という平面的な関係を築くことができる子供の存在は一郎と一郎夫婦の救いという面において重要な役割を担っていると考えられるのである。

【参考文献】

- 呉敬 (2003) 『가족관계로 읽은 소세키 문학』 보고서, P.145-178
- 閔英映 (2007) 「『行人』에 있어서의 「비」」 『일본문화학보』 제36집, p.284
- 최명희 (2001) 「『고진』론—여성상을 실마리로 하여」 『나쓰메소세키文学研究』
 <創刊号>, 제이앤씨. P.524-554
- 伊豆利彦 (1969) 「『行人』論の前提」 『日本文学』, 日本文学協会. pp.1-17
- 瀬沼茂樹 (1970) 『夏目漱石』 東京大学出版会. p.235
- 曾我理恵 (1998) 「『行人』考察—二郎の<いま>—」 『日本文学研究』 33号, 梅光女
 学院大学日本文学会. pp.85-96
- 高橋正雄 (1996) 「漱石文学における癒し—「神経衰弱」者の理解と救済—」 『日本病
 跡学雑誌』 第52号, 金剛出版. pp.30-36
- 土居健郎 (1982) 『漱石の心的世界』 角川書店. p.146
- 夏目鏡子/松岡讓筆録 『漱石の思い出』 (1966) 角川書店
- 萩原桂子 (2004) 「絶対という狂気—漱石『行人』」 『九州女子大学紀要』 第41巻1号,
 九州女子大学. pp.91-104

- 松下浩幸 (2002) 「狂気と恋愛の技術—『行人』論—」 『漱石研究』 15, 翰林書房, pp.44-58
- 山口洋子(2001) 「夏目漱石『彼岸過迄』論—子供の死を手掛かりにして」 『日本文学研究』 36, 梅光学園大学, pp.39-46
- 和田謹吾(1974) 「ひな子抄—「有る程の菊」をめぐって—」 『国文学』 第19卷13号, 学灯社, pp.82-87

要 旨

夏目漱石の後期三部作である『行人』は救いという観点からは最も掛け離れた作品であるといえるくらいに主人公一郎の精神状態は危うい。一郎は「腹」のなかが見えない凡てのものが信じられない。しかし彼は信じられない自分が信じられる自分になりたいと随所に救いの手を差し伸べているのである。本稿では「腹」というキーワードをもとに一郎の救いの道を探求してみた。

まず「友達」に書かれている「腹」がわからずに苦悩した三人の女と貞の結婚について分析した。この三人の女の苦悩はこれから語ろうとする一郎の苦悩が誰もが陥るジェネラルなものであることを示しているし、その結婚は中味の解らない慣習にとらわれた結婚であることを示している。次に「腹」を分かち合うことができない一郎夫婦はお互いが愛嬌のない似た者同士であるがゆえにお互い意識し合いながらもその「腹」のなかを理解する術を知らずに苦悩するのである。

そのような一郎夫婦にとっての子供の存在について考えてみた。漱石の作品にはその殆んどが子供が登場しない、親類からも孤立した夫婦だけの生活を描いている。それにも関わらず『行人』だけが大家族に娘までもいる構成になっている。漱石の作品を見てみると子供はその殆んどが罪を自覚させる存在として描かれている。そして漱石の作品のほとんどが主に男女の三角関係を描いているなかで『行人』は夫と妻と娘という血縁で結ばれた最小単位の家族という三角関係を描いているのである。本稿では一郎の救いはここにあるのではないかと仮説をたててみた。一郎にとって夫と妻と子という関係こそが彼を幸福に導くものであり、そこに一郎と一郎夫婦の救いの可能性があるのではないかと考えられるのである。

キーワード：救い、腹の中、愛嬌、結婚、子供、不信、スピリット

투 고 : 2014. 11. 30
1차 심사 : 2014. 12. 13
2차 심사 : 2015. 1. 3